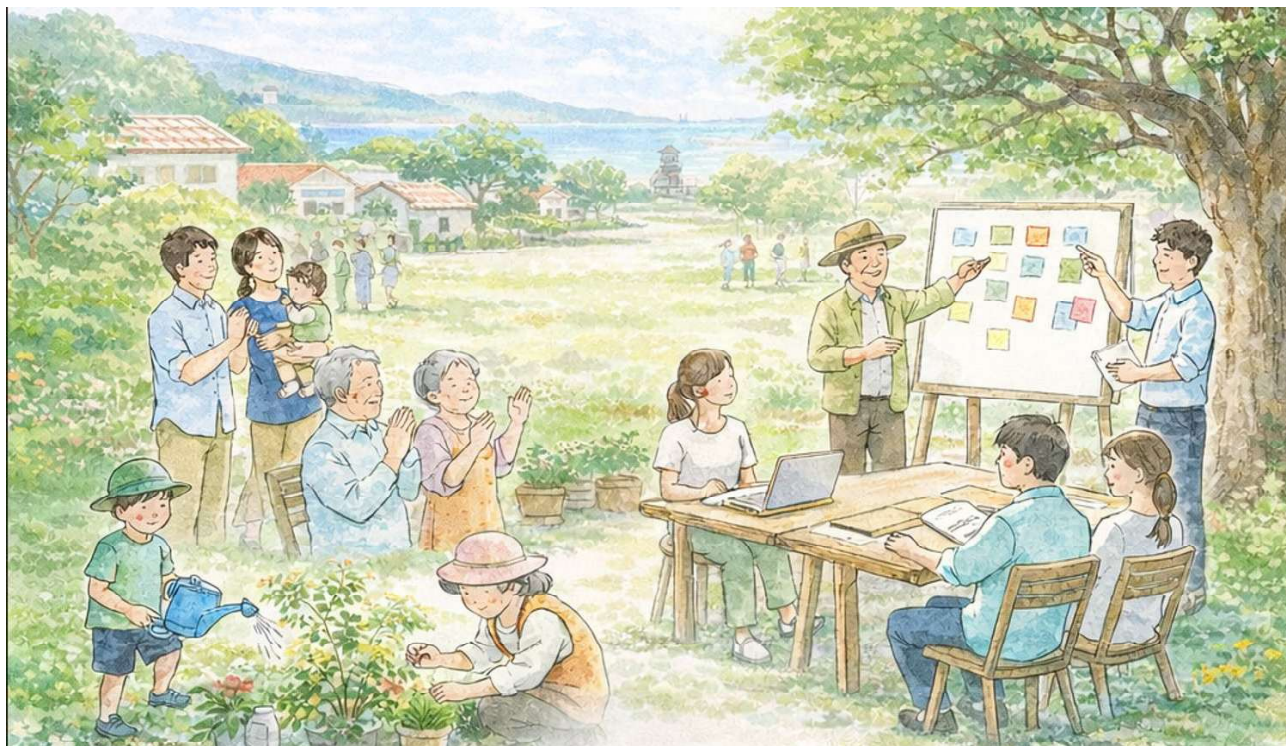


令和7年度 那覇市自治会長会連合会研修会 全体研修会
なはユース自治大学 2025 公開シンポジウム成果報告書

那覇市の自治会の未来を共につくる
— 地域をつなぎ、次世代へつなぐ —



孤独には「役割」を。
不安には「見える化」を。
退屈には「楽しさ」を。

2026年3月

目次

第1部 成果報告編

第1章	公開シンポジウムの概要と開催意義	1
第2章	古島自治会アンケート調査の実施と成果	4
第3章	「孤独・不安・退屈」から考える地域自治の可能性	6
第4章	グループワークの成果分析と実践への示唆	8
第5章	総括と今後の展開	11

第2部 資料編

1.	シンポジウム当日配付資料	13
2.	沖縄大学 経法商学部 教授 島袋 隆志 氏 発表資料	17
3.	那覇市自治会長会連合会 副会長 西平 博人 氏 発表資料	20
4.	沖縄県中小企業家同友会 理事 政策委員長 星崎 浩二 氏 発表資料	24
5.	那覇市社会福祉協議会 事務局長 真栄城 孝 氏 発表資料	26

添付資料

○	シンポジウム参加者アンケート結果の概要	29
○	自治会がすぐ活用できる実践チェックリスト	31



第1章 公開シンポジウムの概要と開催意義

1. 開催概要

(1) 名称

なはユース自治大学 2025 公開シンポジウム

「那覇市の自治会の未来を共につくるー 地域の力をつなぎ、次世代へつなぐー」

(2) 日時・会場

日時：2026年2月14日（土）13:30～16:30

会場：沖縄大学 本館1階 同窓会館

形式：対面開催

参加者：約100名

(3) 主催・企画運営 体制

主催：那覇市自治会長会連合会

企画運営：全体研修会運営委員会（なはユース自治大学）（那覇市自治会長連合会：西平博人・我如古正樹、前原信達、謝名堂聡、前田節子/沖縄大学：島袋隆志・兼島徹/那覇市社会福祉協議会：真栄城孝/沖縄県中小企業家同友会：星崎浩二/那覇市）

協力：沖縄大学地域研究所、沖縄大学経法商学部島袋ゼミ、古島自治会、沖縄国際大学 Uni

2. 開催背景

(1) 自治会を取り巻く現状

那覇市内の自治会では、近年、加入率の低下、後継者不足、活動の担い手の固定化、若年層との接点不足、情報発信の世代間格差といった課題が顕在化している。

一方で、人口減少や高齢化が進む中、地域における支え合い機能の重要性はむしろ高まっている。防災、見守り、居場所づくりなど、自治会が担う役割は拡張しているにもかかわらず、その機能は十分に可視化されていない状況がある。

(2) 課題の再定義

本シンポジウムでは、これらの課題を単なる「組織運営の問題」としてではなく、地域住民が抱えやすい「孤独・不安・退屈」という感情的課題として再定義した。これは、自治会活動を制度論・財政論の枠内で議論するのではなく、**地域における人間関係の質の問題として捉え直す試み**である。

3. 本シンポジウムの目的

本シンポジウムの目的は、次の3点に整理される。

① 自治会の共通課題の共有

那覇市内自治会が抱える課題を可視化し、個別事例ではなく構造的課題として共有する。

② 多主体連携による解決可能性の検討

自治会・大学・企業・福祉・行政・若者が対話を通じ、持続可能な地域自治の方向性を探る。

③ 感情課題の軽減装置としての自治会再定義

「孤独・不安・退屈」を和らげる地域の力を可視化する。

4. プログラム構成の特徴

本シンポジウムは、次の4段階構成で設計された。

(1) 成果報告①：古島自治会アンケート

実証的調査結果の提示

(2) 成果報告②：多主体視点の提示

大学・企業・福祉それぞれの立場からの提言

(3) 討議セッション（グループワーク）

付箋を用いた可視化型対話

(4) 全体共有・今後展望

単発で終わらせない継続構造の提示

プログラム設計の特徴：結論を急がない構造

本ワークでは、「結論を出すこと」を目的とせず、気づきの共有、視点の可視化、実感の言語化を重視した。その理由は、地域課題は短時間の議論で解決するものではなく、**継続的プロセスの設計こそが成果である**と位置付けたためである。

5. 参加者構成の意義

本シンポジウムの大きな成果の一つは、参加者構成そのものにある。

(1) 世代横断型構成

①自治会長・役員層 ②行政関係者 ③企業関係者 ④福祉関係者 ⑤大学生・若手職員

(2) 若者の主体的参加

島袋ゼミを中心に、約60名の学生が参加。

若者が「受講者」ではなく、「対話の担い手」として関与した。

(3) 5者連携体制の深化

昨年度の3者連携から、今年度は5者連携へ拡張。多主体型地域共創モデルの実装が進展した。

6. 本シンポジウムの成果（第1章総括）

第1章において強調すべき成果は、次の通りである。

① 課題の再定義に成功した点

自治会の問題を「運営問題」から「感情課題」へ転換した。

② 多主体対話の実装

実際に約100名規模で横断的対話を実施した。

③ 若者参画モデルの提示

学生を地域課題解決の当事者として位置付けた。

④ 継続前提の設計

グループワーク結果は企画委員会で整理し、次年度に反映する構造を構築。

7. 第1章まとめ

本シンポジウムは、単なる研修会ではない。それは、地域自治の再設計に向けた「対話の場の設計実験」である。

「孤独・不安・退屈」という現代的課題に対し、地域が持つ「つながる力」「支え合う力」「楽しむ力」を再構築するための第一歩となる成果が残せたと考えている。



第2章 古島自治会アンケート調査の実施と成果

1. 調査の位置づけ

本アンケートは、なほユース自治大学 2025 公開シンポジウムにおける議論の基盤形成を目的として実施されたものである。自治会の課題を抽象的に語るのではなく、**具体的地域事例（古島自治会）における実証的データに基づいて議論を行う**ことを狙いとした。

また本調査は、単なる実態把握ではなく、「若者（大学生）が地域と接点を持つ機会の創出」「地域住民との対話の入口形成」「自治会の方向性再検討の材料収集」という3つの意義を持っている。

2. 調査概要

- (1) 実施日時：2025年10月24日（金）13:00～14:00
- (2) 実施主体：沖縄大学 経法商学部 島袋ゼミ学生
- (3) 配布方法：古島自治会区域内の**300世帯へポストイングにより配布**
- (4) 配布部数：300枚
- (5) 回収方法：集会所ポスト投函、Google フォーム回答
- (6) 回収数：11件

3. 調査実施の意義

本調査の重要な特徴は、**大学生が地域へ直接出向き、全世帯へ投函を行った点**にある。これは単なるデータ収集ではなく、「学生が地域空間を体感する」「自治会区域の広がり可視化する」「地域住民に若者が関心を持っていることを示す」という教育的・社会的意味を持つ。実施時間は1時間であったが、地域にとっては「大学と地域が接続する具体的行為」であった。

4. 回収結果の整理

(1) 回収率

配布300枚に対し回収11件。回収率は約3.7%である。一見すると低い回収率であるが、本報告ではこれを「失敗」と捉えない。むしろ以下の3点を明確に示す成果と位置づける。

(2) 無関心層の可視化

回答が少ないという事実は、①自治会活動が十分に認知されていない ②参加の必要性が伝わっていない ③返信する動機付けが弱い といった構造的課題を浮き彫りにしている。これは、今後の設計改善に直結する重要なデータである。

(3) 回答内容の質的価値

11件という数は少ないが、回答内容は具体的であり、特に次の点が注目された。

① イベントへの前向き意識

若年層を中心に「楽しみにしている」「関心がある」との回答が見られた。

▶ 成果：イベントは地域参加の入口装置として有効である可能性が示された。

② 参加障壁の明確化

参加しにくい理由として、「時間が合わない」「内容が分からない」「誰がやっているのか分からない」が挙げられた。

▶ 成果：「意欲の欠如」ではなく、**構造設計の問題である可能性**が確認された。

③ 「できることがある」意識

「特技を活かしたい」「販売や展示ができる」「イベントに協力できる」といった回答が見られた。

▶ 成果：潜在的担い手は存在している。問題は「巻き込み設計」にある。

5. アンケートから見えた構造課題

本調査を通じ、古島自治会において次の構造課題が整理された。

- (1) 情報発信の不足：活動内容が十分伝わっていない。
- (2) 役割設計の曖昧さ：自分に何ができるか」が明確でない。
- (3) 会費徴収困難による接触機会減少：直接訪問の機会が減少している。

6. 「事業型自治会」という新方向性

アンケート設問 19 では、イベントや事業を通じて収益やつながりを生み出す「事業型自治会」に対する設問を設定した。一定の肯定的回答が確認されたことは、自治会の在り方を「徴収型」から「価値創出型」へ転換する可能性を示している。この方向性は、後に第3章・第4章で議論される多主体連携とも接続する。

7. 成果の総括（第2章）

本アンケートの成果は、単なる回収数では測れない。本調査は、「若者と地域の接点形成」「自治会課題の構造可視化」「参加障壁の具体化」「潜在的担い手の存在確認」「事業型自治会という新視点提示」という5点において成果が得られた。

8. 第2章まとめ

本アンケートは、地域の声を聴くための調査であると同時に、地域と大学を接続する実践であった。回収率の低さは課題であるが、それ以上に、今後の改善設計を可能にする**実証的出発点を得たことが最大の成果**である。



第3章 「孤独・不安・退屈」から考える地域自治の可能性

1. 本章の位置づけ

本シンポジウムでは、自治会の課題を「加入率の低下」「後継者不足」「活動の固定化」といった「組織の問題」としてだけでなく、地域に暮らす人が感じやすい「孤独・不安・退屈」という感覚から見直してみよう、という提案に基づき実施された。

なぜ参加が広がらないのか、なぜ担い手が増えないのか、なぜ活動が続きにくいのかを、少し違う角度から考えてみる試みである。

2. 孤独 — 「関わりたい人」が関われる設計へ

アンケートや発表を通して見えてきたのは、「関心がない」のではなく「どう関わればよいか分からない」という状況である。

(1) 学生の視点

島袋ゼミの学生からは、「手伝いではなく、役割を持ちたい」「企画にも関わりたい」という声があった。これは若者に限らず、「自分にできることがある」「必要とされている」と感じられることが、参加のきっかけになることを示している。

(2) 自治会にとっての示唆

孤独を減らすために大きな仕組みは不要である。例えば、「〇〇担当を増やす」「小さな役割を用意する」「イベントごとに“責任者”を立てる」など、関われる窓口を広げることが大切である。孤独は「人が少ないから」ではなく、「関われる余白がないとき」に生まれやすい。

3. 不安 — 見える化と連携の安心感

アンケートでは、「誰がやっているのかわからない」「活動内容がわからない」という声があった。これは単に広報不足というより、「自治会が見えにくい」ことへの不安とも言える。

(1) 企業の視点からのヒント

企業の立場からは、「不安を安心に変える仕組みづくり」「継続性を示すことの重要性」が示された。地域活動も同様に、「定期的な発信」「活動の記録」「次回予定の明示」があるだけで安心感は高まる。

(2) 福祉の視点からのヒント

福祉の分野では、「困ってから支援する」のではなく「日常的につながる」ことを重視している。自治会も、「防災訓練」「見守り活動」「交流の場」を通して“顔の見える関係”を増やすことが、不安の軽減につながる。

4. 退屈 — 参加が“楽しい”と思える工夫

アンケートで最も前向きな回答が多かったのは「イベント」であった。これは非常に重要な示唆

である。

(1) イベントの意味

イベントは単なる行事ではない。「自治会を知るきっかけ」「世代が混ざる場」「役割を持てる機会」でもある。

(2) 事業型自治会の可能性

古島自治会から提案された「事業型自治会」は、「やりたいことを持ち寄る」「小さな挑戦を応援する」「収益も視野に入れる」という新しい考え方である。

これは、「やらされる活動」から「やってみたい活動」へ転換するための一つの方法と言える。

5. 多主体連携の意味

本シンポジウムでは、自治会、大学、企業、福祉、行政が同じ場で議論した。それぞれの役割は違うが、共通していたのは、地域をより良くしたいという思いであった。

自治会にとっての実践的ポイント

- (1) 大学との連携 → 若者に役割を渡す
- (2) 企業との連携 → 継続できる仕組みをつくる
- (3) 福祉との連携 → 孤立を早めに見つける
- (4) 行政との連携 → 制度と地域をつなぐ

6. 第3章まとめ

本章では、「孤独・不安・退屈」という言葉を手がかりに、自治会活動を少し違う角度から整理した。結論はシンプルである。

- (1) 孤独には“役割”を
- (2) 不安には“見える化”を
- (3) 退屈には“楽しさ”を

これらを意識するだけで、自治会活動の設計は変わり得る。

本シンポジウムは、地域自治を難しくするのではなく、分かりやすく捉え直す機会となった。この視点をもとに、次章ではグループワークの成果を具体的に整理する。



第4章 グループワークの成果分析と実践への示唆

1. グループワークの位置づけ

本シンポジウムの討議セッションでは、成果報告および学生発表を踏まえ、参加者が付箋に気づきやアイデアを書き出し、「孤独・不安・退屈」×「学生・若者／企業・地域／行政・制度」のマトリクスで整理を行った。本ワークは「結論を出す場」ではなく、現場の実感を可視化することを目的としたものである。

2. 全体傾向の整理

付箋の内容を整理すると、以下の傾向が見られた。

(1) 多く挙げられたテーマ

- ・イベントをきっかけにした交流
- ・若者の役割づくり
- ・情報発信の工夫
- ・防災と日常のつながり
- ・企業・大学との継続連携

特に「イベント」と「役割」に関する意見が多く、参加者が“入口づくり”を重視していることが読み取れた。

3. 感情軸で再整理した成果分析

ここでは、付箋内容を「孤独・不安・退屈」の3つの視点で整理する。

■ ① 孤独に関する意見

【主な付箋内容】

- ・若者に小さな役割を任せる
- ・気軽に立ち寄れる場所を増やす
- ・イベントだけでなく日常の接点をつくる
- ・子どもを通じた世代間交流
- ・見守り活動を形式化しすぎない

【分析】

孤独への対応は、大きな制度改革よりも「関われる余白」を増やすことが重要だという意見が多かった。孤独は「人が少ないから」ではなく、「関係が生まれるきっかけが少ないとき」に強まる。

【自治会へのヒント】

- ◎小さな担当を増やす
- ◎月1回の“顔合わせ機会”を固定化する
- ◎子ども行事を世代交流に活用する

◎常設の掲示板や LINE グループを活性化する

■ ② 不安に関する意見

【主な付箋内容】

- ・防災訓練を日常イベントと組み合わせる
- ・活動予定を年間スケジュールで見える化
- ・誰が何を担当しているか明確にする
- ・行政との連絡体制を共有する
- ・企業との連携で継続性を担保する

【分析】

不安は「分からない」「見えない」ことから生まれている。安心感は、制度そのものよりも、情報が届く、役割が分かる、継続していると分かることで高まる。

【自治会へのヒント】

- ◎年間予定表を配布する
- ◎役員名簿が見える場所に掲示する
- ◎防災訓練を交流イベントとセットで実施する
- ◎活動報告を写真付きで発信する

■ ③ 退屈に関する意見

【主な付箋内容】

- ◎マルシェや小規模市を開催する
- ◎若者企画デーをつくる
- ◎得意なことを持ち寄る仕組み
- ◎空きスペースの活用
- ◎事業型自治会の試行

【分析】

退屈は「意味を感じられない活動」から生じる。参加が楽しくなるには、自分の強みを活かせる、成果が見える、仲間ができるという要素が必要である。

【自治会へのヒント】

- ◎若者企画枠を設ける
- ◎特技登録シートを作る
- ◎小さなチャレンジ企画を応援する
- ◎成果を必ず共有する

4. 3つの感情をつなぐ共通キーワード

付箋全体を俯瞰すると、3つの感情すべてに共通するキーワードが見えてきた。

- ① 役割⇒参加のきっかけであり、孤独の軽減にもつながる。
- ② 見える化⇒不安の軽減に直結する。

- ③ **楽しさ**⇒退屈を防ぐ最大の要素。
- ④ **継続性**⇒単発で終わらせない仕組み。

5. 自治会がすぐ活用できる実践チェックリスト

本ワークから抽出された内容を、実践的視点で整理すると次の通りである。

【孤独対策チェック】

- 若者に具体的な役割を提示しているか
- 月1回以上、顔を合わせる機会があるか
- 「参加しなくても関われる」窓口があるか

【不安対策チェック】

- 年間スケジュールを共有しているか
- 役員の顔が見える形になっているか
- 活動報告を定期的に発信しているか

【退屈対策チェック】

- 若者企画を取り入れているか
- 小規模でも新しい試みを行っているか
- 成果や成功体験を共有しているか

6. グループワークの成果

グループワークにおける最大の成果は、現場の実感が具体的行動に落とし込まれたことである。感情軸という視点を通じて整理したことで、「孤独＝役割づくり」「不安＝見える化」「退屈＝楽しさ設計」という、実践可能な整理ができた。

7. 第4章まとめ

本グループワークは、単なる意見交換ではなく、自治会が明日から活かせるヒントを可視化する場となった。大きな改革をしなくても、役割を増やす、情報を見せる、楽しさを加える この3つを意識するだけで、地域の空気は変わり得る。



第5章 総括と今後の展開

1. 今年度の成果総括

本年度のなはユース自治大学の取組は、単なるシンポジウム開催にとどまらず、地域自治のあり方を見直す重要な一歩となった。

(1) 実証的な議論の出発点をつくったこと

古島自治会におけるアンケート調査(300世帯配布)は、自治会課題を“感覚的”ではなく“具体的”に共有する材料となった。

回収数は多くなかったが、「関心のある層の存在確認」「参加しにくい理由の明確化」「事業型自治会への可能性」など、今後の方向性を検討する上で重要な示唆が得られた。

(2) 「孤独・不安・退屈」という新しい整理軸を提示したこと

これまで自治会の課題は、「加入率」「役員不足」「財源」といった「運営課題」として語られることが多かった。本取組では、それらを「孤独(つながり不足)」「不安(見えにくさ)」「退屈(意味・楽しさの不足)」という視点から整理した。

これにより、課題がより身近で分かりやすいものとなり、議論が広がりやすくなった。

(3) 多主体連携の具体化

今年度は、自治会、大学、企業、福祉、行政の5者が連携しての取り組みとなった。学生がアンケート配布に関わり、企業・福祉側それぞれの視点で発言し、参加者がグループワークで意見を出すという、実践的な連携の形が示された。

(4) 若者参画モデルの提示

約60名の学生が参加し、若者が地域課題に関わる具体的な姿が可視化された。

若者は「担い手不足を補う存在」ではなく、地域に新しい視点をもたらすパートナーであることが共有された。

2. 次年度に向けた課題

成果があった一方で、次年度に向けて整理すべき課題も明確になった。

(1) 継続の仕組みづくり

単発のシンポジウムで終わらせず、グループワーク結果の整理、実践への落とし込み、定期的なフォローアップを行う必要がある。

(2) 参加の広がり

アンケート回収率の低さは、関心が届いていない層がいることを示している。

発信方法の見直し、対面での接触機会の増加、デジタル活用の工夫が求められる。

(3) 役割設計の具体化

「若者に関わってほしい」という呼びかけではなく、具体的な担当、小さなプロジェクト単位、短期間でも関われる枠組みを設けることが重要である。

3. 次年度の展望（案）（実践計画の方向性）

次年度に向けては、以下の3つの柱で展開を検討してみたい。

【柱1】モデル自治会での実践

古島自治会をモデル地区とし、小規模イベントの試行、若者企画枠の設置、事業型自治会の一部実験を段階的に実施する。

成功事例だけでなく、試行錯誤も共有することが重要である。

【柱2】若者参画の仕組み化

大学との連携を継続し、年度を通じた関わり、単発参加枠の設置、成果共有会の開催を検討する。若者が「参加しやすい」「続けやすい」環境を整える。

【柱3】連携の定期化

5者連携を一過性にせず、年1回の公開シンポジウム、中間共有会、連携会議の開催など、定期的な対話の場を設ける。

4. 政策的視点からの示唆

本取組は、那覇市内自治会の課題にとどまらず、地域自治の持続可能性、若者と地域の接続、多主体共創モデルという観点から、他地域にも参考となる可能性を持つ。

特に、感情軸で課題を整理する方法、小規模実証から始めるアプローチ、若者参画を前提とした設計は、他自治会にも展開可能である。

5. 結語

本年度の取組を通じて確認できたことは、地域自治は決して衰退しているのではなく、設計の見直しを求められているということである。

孤独には「役割」を、不安には「見える化」を、退屈には「楽しさ」を。

この3つを意識することが、自治会活動を次の段階へ進める鍵となる。本シンポジウムは、その出発点を共有する場となった。今後は、議論を実践へとつなぎ、地域の中で具体的な変化を積み重ねていくことが期待される。

<第2部 資料編>

本資料編は、シンポジウムの内容を振り返るとともに、各地域・自治会等における実践に活用いただくことを目的として掲載しています。

特に巻末の「自治会がすぐ活用できる実践チェックリスト」は、自治会における日常の活動の中ですぐに活用できる内容となっていますので、ぜひご活用ください。

第2部 資料編

1. シンポジウム当日配付資料	13
2. 沖縄大学 経法商学部 教授 島袋 隆志 氏 発表資料	17
3. 那覇市自治会長会連合会 副会長 西平 博人 氏 発表資料	20
4. 沖縄県中小企業家同友会 理事 政策委員長 星崎 浩二 氏 発表資料	24
5. 那覇市社会福祉協議会 事務局長 真栄城 孝 氏 発表資料	26

添付資料

○ シンポジウム参加者アンケート結果の概要	29
○ 自治会がすぐ活用できる実践チェックリスト	31

なはユース自治大学 2025 公開シンポジウム プログラム

- 那覇市の自治会の未来を共につくる～地域のかをつなぎ、次世代へつなぐ～

■ 開催概要

- 日時：2026年2月14日(土) 13:30～16:30
- 会場：沖縄大学本館1階同窓会館(200名収容：対面形式)
- 主催：那覇市自治会長会連合会
- 企画：なはユース自治大学実行委員会
(那覇市自治会長会連合会/沖縄大学/那覇市社会福祉協議会/中小企業家同友会/那覇市)
- 協力：沖縄大学地域研究所、沖縄大学経済学部鳥袋ゼミ、古島自治会
- 対象：那覇市内自治会長、役員、行政関係者、企業・福祉団体、学生

■ 目的

那覇市内の自治会が共通して抱える課題を共有し、多様な立場(自治会・大学・企業・福祉・行政・若者)が連携しながら、地域のかを次世代へつなぐための実践的な方向性を共に考える。
あわせて、現代社会において地域住民が抱えやすい「孤独・不安・退屈」といった課題にも目を向け、昨年度シンポジウムで得られた知見を共有した上で、これらを軽減しうる地域のかをつなぐりや活動の在り方を探る。
人口減少や地域の高齢化が進むなかで、各地域がそれぞれの強みを活かしながら支え合う仕組みを築くことが求められており、古島自治会でのアンケート調査と学生の提案を一つの事例として位置づけ、地域の多様な知見をもとに、自治会の持続可能な未来像を描くことを目的とする。

■ 概要

高齢化や後継者不足、加入率の低下など、地域コミュニティが抱える課題を共有し、「地域のかをどう次世代につなぐか」をテーマに、自治会・大学・企業・福祉・行政が対話を通じて学び合う場とする。
冒頭では、昨年度シンポジウムの開催報告を通じて、これまでに得られた視点や成果を参加者全体で共有する。
その上で、地域住民が抱える「孤独・不安・退屈」といった感情面の課題にも着目し、それらを探らげつなぐりや居場所づくりの可能性を検討する。
那覇市全体を見据えた地域自治の未来を考え、世代や組織を越えた共助・共創のあり方を探る。

■ プログラム

時間	内容	登壇者・担当	概要
13:30 ～ 13:40	開会挨拶・趣旨説明	那覇市自治会長会連合 会長/沖繩大学学長	「地域のかをつなぎ、次世代へつなぐ」という テーマの意義を共有。
13:40 ～ 14:10	成果報告①：那覇 市の自治会の現 状と取組事例	鳥袋教授・西平会長	古島自治会でのアンケート結果と那覇市全体 の共通課題を共有するとともに、昨年度シンポ ジウムで得られた学生や参加者の視点を振り 返る。
14:10 ～ 14:30	成果報告②：多主 体連携の視点	星崎氏(中小企業家同 友会)/真栄城氏(那覇 市社会福祉協議会)	企業・福祉・大学の連携事例から、孤独・不安・ 退屈の軽減を含む地域課題解決へのアプロ ーチを提示。
14:30 ～ 14:45	休憩・交流	—	参加者同士の自由な情報交換の時間。
14:45 ～ 15:55	討議セッション： 「地域のかをど う次世代につな ぐか」	那覇市内自治会長、関 係団体代表、企業・福 祉・大学の若手職員お よび学生	成果報告および学生発表を聞きながら、参加者 が気づいたことや、やってみてみたいと感じたこと を付箋に書き出し、グループ内で共有する。 その後、出された意見を「孤独・不安・退屈」 という視点と、「学生・若者」「企業・地域」「行 政・制度」との関わり方の観点から、話し合いな がら整理・可視化する。 本セッションでは、結論をまとめめることを目的 とせず、参加者それぞれの実感や経験をもと に、地域のかの可能性を見える形にすることを 重視する。 なお、グループワークの結果は、後日、企画委 員会において整理・検討を行い、成果報告書や 今後の取組検討に反映する。
15:55 ～ 16:20	全体共有・コメン ト	各グループ代表・司会 進行	討議結果を共有し、地域間で共通する課題と展 望を整理。
16:20 ～ 16:30	閉会挨拶・今後の 展望	那覇市自治会長会連合 会代表/沖繩大学	今後の連携や次年度への継続的取組を共有。

【資料④】

なほユース自治大学 公開シンポジウム
昨年度の視点を踏まえ、今年度の議論へつなぐために

① 学生発表・グループワークで出された主な意見・アイデア(昨年度)

※昨年度シンポジウム(学生発表+10グループの議論)を開催報告に基づき再整理

1. 若者の自治会・地域活動への関わり

- 学生は「手伝い役」ではなく、企画や運営に関わる役割を求めている
- 自治会を「地域課題を解決する実践の場」と捉え、関わりたい意欲がある
- フィールドワークを通じ、地域への関心や愛着が高まった
- ▶ 視点 ⇒ 役割・裁量・達成感が継続的な参加につながる

2. 地域資源の活用と居場所づくり

- 公園や地域施設など、既存資源を活かす余地が大きい
- 気軽立ち寄れる場、用事がなくても行ける空間が少ない
- 居場所は「何かをしなくてもよい場」であることが重要
- ▶ 視点 ⇒ 居場所は孤立を防ぎ、関係を育てる基盤

3. 世代間交流と情報発信

- 高齢者(掲示板・紙媒体)と若者(SNS・LINE)で情報手段が異なる
- 若者が情報発信を担うことで、自治会活動が見えやすくなる
- 世代間の接点が増えることで相互理解が進む
- ▶ 視点 ⇒ 情報発信は世代をつなぐ媒介

4. 学校・大学・企業・行政との連携

- 授業・ゼミと地域活動を結びつけることで参加のハードルが下がる
- 企業・社協・行政との連携は、自治会の負担軽減にもつながる
- 多主体が関わることで、活動の持続性が高まる
- ▶ 視点 ⇒ 連携は継続性を支える仕組み

5. イベントを通じたつながり

- 祭りやスポーツイベントは世代を超えた交流の入口
- 子ども・若者が関与しやすい企画が重要
- イベントは自治会の存在を知ってもらう機会になる
- ▶ 視点 ⇒ イベントは楽しさを通じて参加を生む装置

古島自治会アンケート

～古島地域をもっと良くするために～

古島自治会 会長 西平 博人
このアンケートは、古島自治会の今後の活動をより良くするために、古島地域に住む・働く・お店を営む皆さんの声を伺うものです。防災・日常の地域活動・イベントなど、地域での暮らしに関わるテーマを中心に、「自分の特技やアイデアを活かして地域に貢献する」新しい形の地域づくりを目指しています。

本調査は、沖縄大学 経法商学科 島袋ゼミの学生の協力を得て実施しています。学生たちは、皆さんからお寄せいただいた意見を整理し、地域の現状と課題、そして今後の活動の方向性を古島自治会と一緒に考えていきます。みなさん一人ひとりの思いや気づきが、地域の未来をつくる大切な力になります。ぜひ率直なご意見・ご感想をお聞かせください。 <提出方法：①大神公園集会所ポスト、②グループフォームより回答>



I. 回答者について

1. あなたの立場を教えてください (複数選択可)
 - 古島自治会の会員 古島地域に居住 古島地域で勤務 古島地域でお店・事業をしている
 - その他 ()
2. あなたの年代を教えてください
 - 10代 20代 30代 40代 50代 60代以上

II. 地域との関わり・自治会への印象

3. 古島自治会の活動をどのくらいご存じですか？
 - よく知っている ある程度知っている あまり知らない 全く知らない
4. これまでに古島自治会や地域行事に参加したことがありますか？
 - よく参加している ときどき参加している ほとんどない 全くない
5. 自治会や地域の活動に「参加しにくい」と感じる理由があれば教えてください (複数選択可)
 - 時間が合わない 内容がよくわからない 誰がやっているのかわからない 興味がわかない
 - 自分ができることがないと思う その他 ()
6. 自治会の活動や目的について、どのような印象をお持ちですか？ (自由記述)

III. 防災・日常・イベントの3つの柱

7. 古島地域の「防災活動」について関心はありますか？
 - とても関心がある 関心がある あまり関心がない 関心がない
8. 災害時、地域で助け合うためにどんな備えや仕組みがあると思いますか？ (自由記述)
9. 普段の生活の中で、地域をより良くするためにどんな活動ができると思いますか？ (複数選択可)
 - 公園や道路の清掃・緑化活動 高齢者や子どもの見守り 文化・スポーツ活動 地域イベントの運営 安全パトロール その他 ()
10. 地域のイベント(お祭り、文化行事など)について、どのように感じますか？
 - 楽しみにしている 関心はあるが参加しにくい 内容をもっと知りたい 関心がない

IV. 自分の力を活かす地域づくり

③ 気づき・アイデア整理シート（付箋貼付用）

※ 付箋を貼るためのシートです（書き込まなくてOK）

	学生・若者	企業・地域	行政・制度
孤独 (つながりが少ない)	付箋を貼る	付箋を貼る	付箋を貼る
不安 (先が見えない・分らない)	付箋を貼る	付箋を貼る	付箋を貼る
退屈 (関わる場が少ない)	付箋を貼る	付箋を貼る	付箋を貼る

④ 全体共有（30秒）

整理が終わったら、次の3点をグループで確認し、全体に共有していただきます。

1. 付箋が多く集まった場所（＝関心が高かったところ）
2. すでに地域でやっていること
3. これからやってみたいこと（小さな一歩）

⑤ このワークの位置づけ

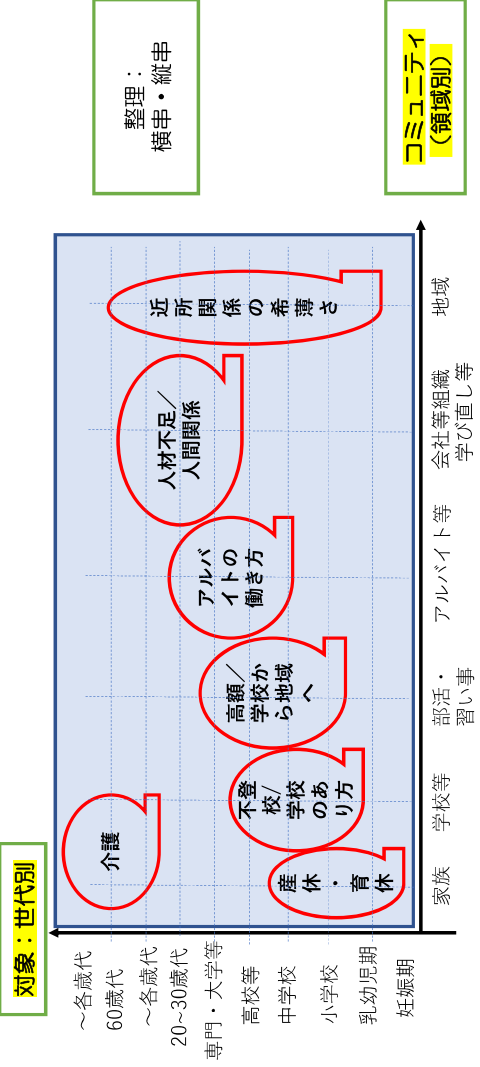
- 今日**は考えを出す・見える形にするところまで行います
- その後、企画委員が今日の結果を整理し、今年度のワークシートや報告書に反映します。

皆さんの気づきや意見が、今後の自治会活動や地域の取組につながっていきます。

地域（自治会）と若者 ステイクホルダーの拡がりと持続性の再認識 企業・若者・社協はどのようにつなげられるのか

沖縄大学 島袋隆志
2026年2月14日

世代別・領域別の課題整理



自治

- ・ 自分や自分たちに関することを自らの責任において処理すること。例)「大学のー」、「ーの精神」
- ・ 「地方自治」の略。

『広辞苑』より

自分たち ≠ 自分らだけ
≡ 多様なメンバー

社会性

- ・ 集団を作って生活しようとする性質。
- ・ とじこもらず、周囲の人々と交際しようとする生活態度。
- ・ 社会的な問題への関心があること。『広辞苑』より

社会性 ≠ 孤独、不安、退屈
≡ つながり

(全年代に共通するテーマ)

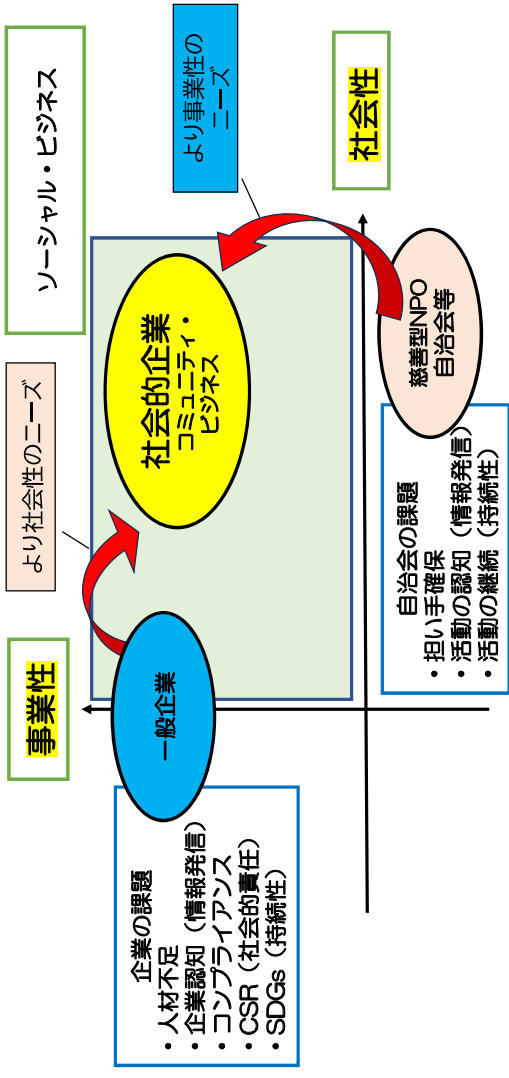
「古島自治会アンケート」から働き盛り世代：時間が合わない

- イベントなど一時的手伝いはOK?
- 子・孫を通じてつながり
- 子育て世代/高齢者にもOK
- ・ **誰がやってるの？**
 - **継続的な情報の発信**
- ・ **あまり関心・興味はない**
 - **興味あるテーマを用意する**

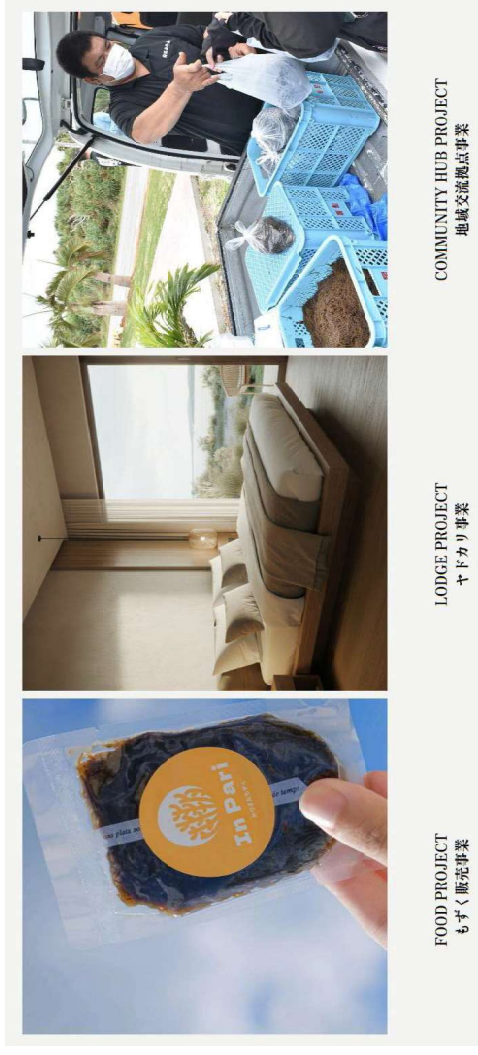
- ・ 「孤独、不安、退屈」の払拭
 - 個人の知見を活かすには？

5 自治会や地域の活動に「参加しにくい」と感じる理由がゆめは増えてくたさ(複数選択)	6 自治会の活動や目的についてどのような印象をお持ちでしょうか。(自由記述)	7 本島地域の「防災活動」について関心はありますか？
時間が合わない		とても関心がある
興味がない	エイサーとか、やってくれるのがうれしい	あまり関心がない
時間が合わない	昔き風習～時話を語っていて、非常に好意的	関心がある
興味がない	本切なことだと思います。	あまり関心がない
誰がやっているのかわからない、子育て中のため	以前はよく地域活動をやっていたけど、今は何をしてるかわからない。	関心がない
時間が合わない	地域によって異なる活動	関心がある
内容がよくわからない、誰がやっているかわからない		関心がある

自治会・企業・社協の方向性(つながりの模索)



「狩俣自治会」と「かりまた共働組合」事業の紹介
<https://inpari.base.shop/>



「狩俣自治会」と「かりまた共働組合」

私たちの想い

- ・狩俣地区には、120年以上の歴史を持つ「**狩俣自治会**」。
- ・自治会では、高齢者のためのEV(電気自動車)での送迎や、子どもたちのための配食サービスなど、地域のための活動を積極的に行ってきた。
- ・しかし、役員の任期が決まっている自治会だけでは、これら大切な活動を継続していくことに限界があります。



「かりまた共働組合」

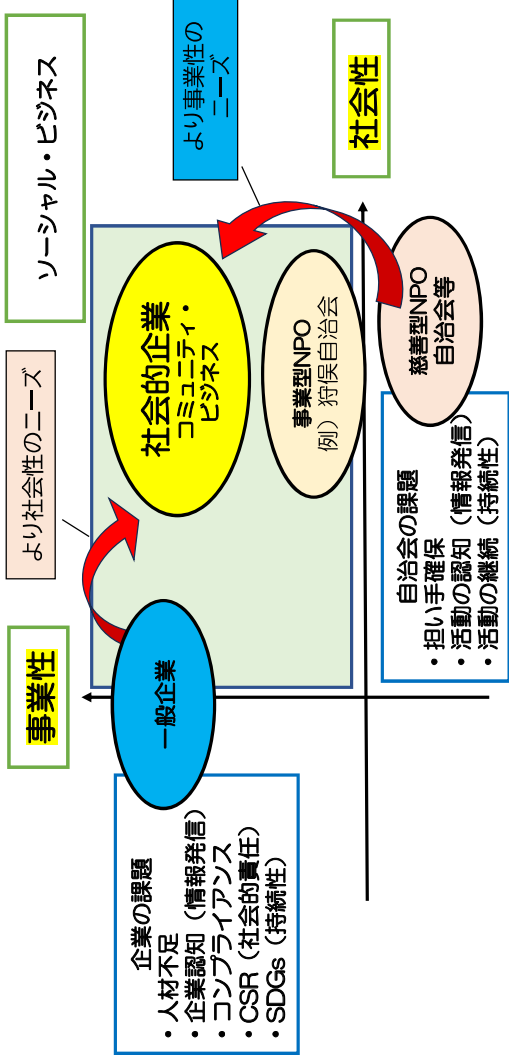
- ・「この活動を止めずに、もっと発展させたい」
 - ・「若者が地元で誇りを持って働ける仕事をつくりたい」
 - ・「移住してきた人たちが、地域に溶け込めるきっかけをつくりたい」
- 私たちは、**地域に本当に必要な事業を、住民自身の力で創り出していきます。**

主な事業内容

島の資源を、宝に、狩俣の豊かな自然を活かし、これまで**活用**されていなかった魚を**買い取って唐揚げなどの加工品**にしたり、**モズクや地域の特産品を販売**したりと、島の恵みに新たな価値を与え、6次産業化に挑戦しています。



自治会・企業・社協の方向性(つながりの模索)



古島自治会 アンケート報告



1

アンケートを行った背景

古島自治会は、閉会する予定だった自治会です。コロナ以降、イベントも地域の絆ん所を祭る、はるがん祭だけで、地域住民との繋がりがりも生まれず、必然的に後継者とも繋がらず、閉会を予定していました。

それを私がピンチヒッター的に預かり、現在3人の役員で運営しています。

また会員から会費収入を取っておらず、那覇市からの補助金等で繋いで、それも自治会と地域の繋がりの希薄さに拍車がかかった状況。

現状はゼロどころかマイナスからのスタート。ですが、我々はそれを真っ新たなキャンパスだと捉え、新しい方法やアイデアを試していこうと考えています。

それを始めていく1歩目として、今回地域の方々へのアンケートを沖縄大学島袋ゼミさんと連携して行いました。

2

アンケートから見えた事①

- ・自治会への関心の少なさ



3

アンケートから見えた事②

- ・次へのステップへ
- ・交流の場の形成
- ・会話のキーワード



4

交流する場を生み出すために ・ビジョン型自治会をやりたい



5

現在の古島自治会の主な収入

- ①・会費による収入（私島自治会例：500円/月）
メリット：
・安定した予算が確保でき、予算計画が立てやすい。
・会費を徴収する際、会員の状況を知ることができる、繋がりが継続する。
・参加方法の一つである。

デメリット：
・会費を徴収するのが大変。
・後継者が見つかりにくい。

- ②・那覇市からの補助金
・連絡事務委託費
・保安灯補助金
・活動助成金

- ③・その他
・企業の助成金
・自動販売機収入

現在、古島自治会はデメリットから①を手放し、②と③の自販機収入で運営している。



6

現在の古島自治会の主な行事と支出

- ①・保安灯、集会所電気料
・保安灯に関しては、那覇市から補助金がある
・集会所の電灯、クーラー、自動販売機に使用。水道料も。

- ②・大神公園草刈り清掃費
・飲食費
・燃料費

- ③・はるかん祭
・飲食費
・住職への謝礼金等

- ④・定期総会
・飲食費
・資料作成費

- ⑤・事業費
・無料演技レッスン（収入無し、講師料支払い）

現在、古島自治会の3人の役員、監査は手当なし、無償がランデミアで活動している。



7

ソーシャルビジネスの

「事業で価値を生み出し地域課題を解決する」

この観点を自治会に導入したい。

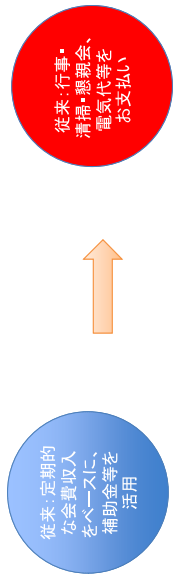
要約すると

「地域でやりたい事、を地域に提案し、寄付金を

募るクラウドファンディング的な取り組み」

8

ビジョン型自治会モデルへ

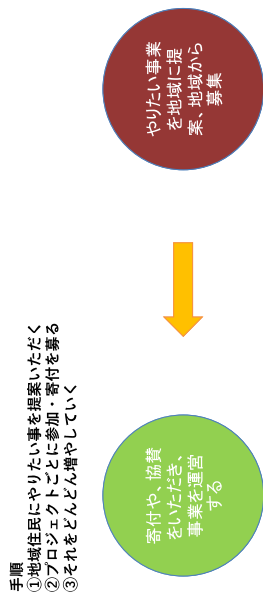


会費による収入 (松島自治会例：500円/月)

- ・ 安定した予算が確保でき、予算計画が立てやすい。
- ・ 会費を徴収する際、会員の状況を知ることができる、繋がりが継続する。
- ・ 参加方法の一つである。
- ・ デメリット：
 - ・ 会費を徴収するのが大変。
 - ・ 後継者が見つかりにくい。

その他：那覇市や企業からの補助金

ビジョン型自治会モデルへ



- 手順
- ① 地域住民にやりたい事を提案いただく
 - ② プロジェクトごとに参加・寄付を募る
 - ③ それをどんどん増やしていく

かつて、会費収入のデメリット
 ・ 会費を徴収するのが大変。
 ・ 後継者が見つかりにくい。

から会費収入とん振した経緯のある市島自治会で、比重を事業収入へ持っていく。
 事業費を支かっていたいたたいた方を自治会員とするが、もしくはサポーターとするが、など検討中。

会費収入のメリットである
 ・ 安定した予算が確保でき、予算計画が立てやすい。
 ・ 会費を徴収する際、会員の状況を知ることができる、繋がりが継続する。
 ・ 参加方法の一つである。
 は無効でないの、その件も残していく。
 スコアアップアップとしても検討。

地域を元気づける事業 ① 無料演技レッスン FUN factory

無料演技レッスン「FUN factory」とは、古島自治会が主催となり、演技レッスンをやっている会社と提携して行われている事業である。対象は、地域の子ども達に平等に無料で開放され、コミュニケーションの元である、表現についてプロが指導する。

講師は、プロドワイエでも学び、活動した経験のある講師で、講師への手当は支払われる。

また、無料で学んだ子どもたちが、順調にステップアップするシステムも導入している。
 学んだ子ども達の成果発表も、地域の方々に向けたイベントにする予定で、子どもたちが地域を元気にする仕掛けにも挑戦する。



地域の安全を生み出す事業 ② 防災イベント キキレンジャー

自然災害や火災、インターネット犯罪などの危機への知識や経験が少ない小学生向けの防災、危機対応イベントの実施。防災、危機に特化した体験や展示、講演を行い、イベントのコンテンツを通して、知識を深めた子どもをキキレンジャーキッズに認定している。

那覇市や、沖縄コンベンションセンターなどで開催している、地域の小中学校と連携して古島地域への開催も早くちゅうです。





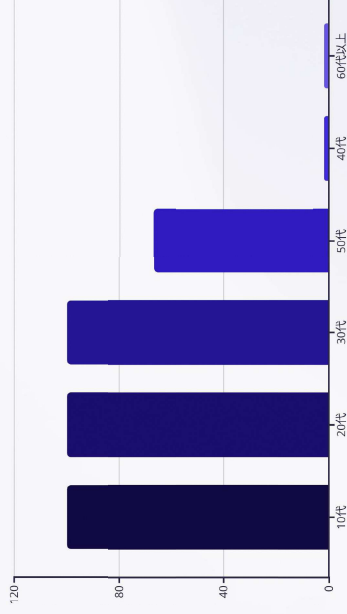
古島自治会アンケートで地域イベントを楽しみにしている人の特徴を分析

楽しみ・良い・好き等の肯定回答をした方々の傾向を詳しく見ていきます。

Made with GRAVIO

① 年代の特徴

◆ 若年層～50代に多い



傾向

- 10～30代は全員がボジティブ回答
- 50代も比較的高い
- 40代・60代以上は今回の回答では肯定なし

▶ 若年層ほどイベントへの期待感が強い傾向が見られます。

Made with GRAVIO

② 参加経験との関係

よく参加している

100%

楽しみにしている割合

ほとんどない

100%

楽しみにしている割合

全くない

25%

楽しみにしている割合

傾向

- 「全く参加したことがない」層は楽しみにしている割合が低い
- 一方で「ほとんどない」人でも期待感はある
- ▶ 「完全に未接触層」はイベントへの期待が弱い可能性
- ▶ ただし「参加は少ないが関心はある層」は存在する

Made with GRAVIO



③ 自治会認知度との関係

楽しみにしている人の中には、

「よく知っている」人

「まったく知らない」人

が混在しています。

- ▶ イベントの魅力は自治会認知とは必ずしも連動していない

Made with GRAVIO



④ 防災関心との関係

- ・ 防災に関心が高い人もいる
- ・ 逆に関心が低い人も含まれる
- ▶ イベント期待層は、防災意識とは直接相関が弱い

イベントへの期待感とは防災関心とは別の要因で形成されている

⑤ 共通する心理的特徴(設問14より)

楽しみにしている人が選んでいる傾向:

- 「仲間がいる」 
- 「感謝や成果が見える」 
- 「趣味・特技を活かせる」 

▶ “参加の心理的ハードルが低い環境”を求めている

総合的な特徴まとめ

地域イベントを楽しみにしている人は:

- 1 若年層(特に10~30代)に多い
- 2 完全未参加層ではない
- 3 強い自治会帰属意識があるとは限らない
- 4 「仲間」「気軽さ」「達成感」を重視している
- 5 防災など硬いテーマより“楽しさ”重視傾向



戦略的示唆

- ① 若年層を“イベントハブ”にする
→ 若者主体の企画参加
- ② 未参加層へのアプローチ
→ 「まずは遊びにきてOK」型の設計
- ③ 参加の心理的障壁を下げる
→ 小さな役割、短時間参加
- ④ 成果の見える化
→ 写真共有、SNS発信、感謝の仕組み



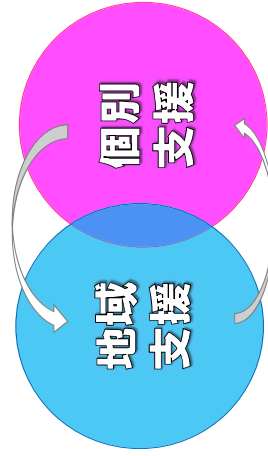
「なはユース自治大学2025」
那覇市社会福祉協議会の地域活動について
～地域の力をつなぎ、次世代へつなぐ～



日時：令和8年2月14日（土）
場所：沖縄大学

コミュニティソーシャルワーカー（CSW）とは

- ・生活上の課題を抱える人や家族に対する『個別支援』
- ・生活課題の解決に向けた地域づくり『地域支援』



- 地域のニーズ把握
- 地域活動の仕組みづくりや継続支援

一体的な支援

- 寄り添った支援
- 地域住民や関係機関と連携した支援
- 深刻化の防止

3

1. 社協(社会福祉協議会) とは何か？

- ・ 社協は、**社会福祉法（第109条）**において地域福祉の推進を図ることを目的とし、制度にもとづく**社会福祉事業**だけでなく多様な**社会福祉を目的とする事業の企画・実施や連絡調整**などを行う**団体として位置づけられ**市区町村、都道府県・指定都市及び全国段階に設置されています。
- ・ **社協の使命（市区町村社協経営指針）**
- ・ 市区町村社協は、地域福祉を推進する中核的な団体として、地域住民及び福祉組織・関係者の協働により**地域生活課題の解決に取組み、誰もが支え合えないながら安心して暮らすこと**ができる「**ともに生きる豊かな地域社会**」をつくりを推進することを使命とする。

那覇市での孤独死、地域住民の繋がりが希薄化



【地域課題】
地域（近隣の方）との繋がりがなく、
相談できる人が少なくなかった。

【引用】沖縄タイムス・琉球新報

地域住民の**変化**にいち早く気付く 地域をつなぐ架け橋

- 自治会等の団体で「**地域見守り隊**」を結成
- 困った時に助けを求められることができる関係性の構築
- 問題の深刻化を未然に防ぐ（関係機関へつなぐ）



5

自治会行事や地域の世代間交流として



自治会での餅つき大会



子どもたちのお楽しみ会



高齢者を招いてのゆんたく



地域福祉まつり



みんなでクリスマスパーティー



自分のまちを綺麗に!

ふれあい・いきいきサロン ポイント

住民同士のふれあいを通して、ご近所付き合いの輪を広げていきます。



子育てサロン



ゆんたくを楽しむ（なの花会）



売店でのゆんたく



子育てフレンズ



民謡を通しての交流



男のクッキング

地域支援

～こんな社会情勢だから出来ることを～

生活困窮世帯への食料支援



優しさのおすそわけ

《内容》

- 企業や個人から、食料の寄贈
- 生活困窮世帯へ食料を提供

《効果》

- 生活保護を受けるまでの繋ぎとして
- 誰かの優しさで、助かる人がいる
- 食料支援を通じた、生活課題の抽出

食料寄贈（個人・団体：間接的支援）⇒食料提供（社協：直接的支援）

歳末おそうじ隊・高齢者等生活支援事業

学生ボランティアを中心に高齢者や障がい者の自宅ボランティアが訪問しお掃除を実施します。



オリエンテーションの様子



浴室の掃除



台所の整理



近所の方も協力♪



自宅周辺の草刈り



企業や電気保安協会の協力を得て電球交換や寝具の洗浄も行なっています。

～なはこどもの居場所ネットワーク「糸」～

地域の子は地域で育てよう!

なはこどもの居場所ネットワークでは、子どもと大人、地域の方々のつながりを大切にしたいと考え、地域と連携し地域に開かれた居場所づくりに取り組んでいます。多様な活動を通して、子どもたちの自己肯定感を育み、子どもの権利が守られる地域を目指しています。

食事・食育

- 無料または低額
- おみそや漬物などを作る(運動の励み)
- 食育(栄養バランス・農業体験等)
- 調理体験

学び・学習支援

- 個別指導や学習のサポート
- 居場所学習やキャリア教育
- パソコン学習

体験活動

- 季節ごとのイベント
- お祭りやパン作り体験
- 職場体験やキャリア講演会など

なはこどもの居場所

見守り・気づき

子どもたちや親と話し合うことで、より深い気づきや学びが生まれる。気づき、相談や支援などに早い段階でつなぐことができるようになる。

地域・多世代交流

- 子どもだけでなく、地域の大人との交流
- 地域に暮らす子どもから高齢者までがこどもも参加になれば、地域づくりにつながる。



アトリエで子どもたちと制作活動

九州府県こども支援つながる研究会

子ども食堂で地域のみなさんと調理体験

児童発達支援センター「アトリエ」で制作

まとめ

▶福祉活動の視点から

- ◆ 大学や社協の連携窓口を通じて自治会とつながる。※学生主体のプロジェクトに参加する。
- ◆ 自分の住んでいる地域を知ることからはじめよう⇒自治会活動のイベントに参加しよう。企画立案や広報(SNS)など学生の得意分野を活かす。
- ◆ 社協CSWや地区の民生委員児童委員など地域活動を推進している方と関わり、一緒に活動することで自治会活動にもつながる。

福祉活動は地域に関わるきっかけにしては。

市民の笑顔あふれる支えあいのまち ～頼られる社協を目指して～

ご清聴ありがとうございました。



なはこども福祉センター

シンポジウム参加者アンケート結果の概要

本シンポジウムの参加者を対象に、研修終了後アンケートを実施した。自由記述形式で寄せられた回答を整理すると、主に次の観点から意見が示されていた。

- 学生・若者の視点
- 自治会関係者の視点
- 世代を超えた交流の評価
- 自治会活動の課題と改善提案

以下では、主な意見を整理して示す。

1 学生・若者からの主な意見

学生からは、**自治会活動の実態を初めて知った**という声が多く寄せられた。自治会の課題や地域の現状を理解する機会となったという意見が多く見られた。

(1) 自治会の活動を知る機会

- 「自治会がどのような活動をしているのか初めて知ることができた」
- 「自治会の現状や課題について理解することができた」
- 「自治会を運営している方の思いを聞くことができた」

また、地域活動への関心が高まったという意見も見られた。

- 「地域の活動を調べて参加してみようと思った」
- 「地域の力に少しでもなりたと思った」

(2) 世代を超えた対話の評価

自治会関係者と直接対話できたことについて、学生からは高い評価が寄せられた。

- 「普段話す機会がない自治会の方と話せて貴重な経験だった」
- 「地域の方の意見を聞くことで新しい視点を得ることができた」

(3) 自治会への提案

学生からは自治会活動の改善に向けた提案も多く見られた。

特に多かった意見は **SNS による情報発信の強化**である。

- SNS を活用した自治会活動の情報発信
- 若者が参加しやすいイベントの開催
- 地域交流の機会の充実

2 自治会関係者からの主な意見

自治会関係者からは、学生との交流を評価する意見が多く寄せられた。

(1) 学生参加への評価

多くの自治会関係者が、若い世代の参加を歓迎していた。

- 「学生の参加で多くのアイデアが参考になった」
- 「若い人の感性を自治会活動に活かしたい」

また、学生との対話が自治会活動のヒントになったという声もあった。

- 「大学生の意見が聞けて方向性が見えた」
- 「若い世代の意見を聴くことができて良かった」

(2) 若者参加への課題

一方で、若者と自治会との距離を感じるという意見も見られた。

- 「自治会と若い人の間にハードルがある」
 - 「若い世代の行事参加をどう増やすかが課題」
- また、情報の伝え方についての課題も指摘された。

3 共通して見られた意見

学生と自治会関係者の双方から共通して見られた意見として、次の点が挙げられる。

(1) 世代交流の重要性

今回のシンポジウムは、世代を超えた対話の場として評価されていた。

- 若い世代の意見が自治会にとって参考になる
- 学生にとって地域の現状を理解する機会となる

(2) 情報発信の必要性

自治会活動の情報が十分に伝わっていないという認識は、学生・自治会双方に共通していた。

そのため、

- SNS の活用
- ホームページの整備
- 活動内容の見える化

などの必要性が指摘された。

(3) 参加しやすい活動づくり

自治会活動への参加を促すためには、

- 楽しさのあるイベント
- 世代交流の機会
- 若者が関われる役割づくり

が重要であるとの意見が多く見られた。

4 アンケート結果のまとめ

今回のアンケートから、次の点が明らかになった。

- 学生にとって自治会活動を知る貴重な機会となった
- 自治会にとって若者の視点は新しい気づきをもたらした
- 世代を超えた対話の場の重要性が確認された

今回のシンポジウムは、自治会・大学・地域社会をつなぐ対話の場として大きな意義を持つ取り組みであったといえる。

～ 感想結果 ～

・自治会 : とても良かった 9 良かった 7 ・沖縄国際大学 : とても良かった 6 良かった 1
 沖縄大学 : とても良かった 3 5 良かった 9 普通だった 1

自治会がすぐ活用できる実践チェックリスト

地域活動を活性化するためのポイントを、「孤独」「不安」「退屈」という3つの視点から整理した。自治会活動を振り返りながら、該当する項目にチェックして活用していただきたい。

<自治会活動 実践チェックリスト>

視点	チェック項目	チェック
孤独への対応 (役割づくり)	若者や新しい参加者に「小さな役割」を用意している	<input type="checkbox"/>
	月1回以上、住民が顔を合わせる機会（イベント・交流会など）がある	<input type="checkbox"/>
	行事に参加しなくても関われる仕組み（掲示板・LINEなど）がある	<input type="checkbox"/>
	子ども行事を世代交流の機会として活用している	<input type="checkbox"/>
	気軽に立ち寄れる場（公民館・集会所など）がある	<input type="checkbox"/>
不安への対応 (見える化)	自治会の年間スケジュールを住民に共有している	<input type="checkbox"/>
	自治会役員の名簿を掲示・配布している	<input type="checkbox"/>
	活動報告を写真などを使って発信している	<input type="checkbox"/>
	防災活動を日常イベントと組み合わせて実施している	<input type="checkbox"/>
	行政や関係団体との連絡体制が共有されている	<input type="checkbox"/>
退屈への対応 (楽しさづくり)	若者が企画するイベントや活動を取り入れている	<input type="checkbox"/>
	小規模でも新しい試み（マルシェ・交流会など）を行っている	<input type="checkbox"/>
	住民の得意分野を活かす仕組み（特技登録など）がある	<input type="checkbox"/>
	空きスペースや地域資源を活用している	<input type="checkbox"/>
	活動の成果や成功体験を住民で共有している	<input type="checkbox"/>

<活用のポイント>

このチェックリストは、本シンポジウムのグループワークで出された意見を整理し、自治会活動の実践に役立つ形でまとめたものである。自治会活動を活性化するためのポイントは、次の3つに整理できる。

- 孤独には「役割」を
- 不安には「見える化」を
- 退屈には「楽しさ」を

大きな制度改革を行わなくても、「役割を増やす」「情報が見えるようにする」「楽しさを加える」この3つを意識するだけで、地域の活動は大きく変わり得る。

本チェックリストが、自治会活動を振り返り、新たな取り組みを考えるきっかけとなることを期待したい。

発行年月：2026年3月
発行：全体研修会運営委員会（なはユース自治大学）

主催：那覇市自治会長会連合会
協力：沖縄大学／那覇市社会福祉協議会／沖縄県中小企業家同友会／那覇市